

# 歴史を紐解き、未来へ繋ぐ

東京大学安田講堂の改修で引き継がれた大学の記憶

香山壽夫(工学部建築学科名誉教授/設計) 西村幸夫(先端科学技術研究センター所長/キャンパス計画室長) 千葉学(工学系研究科教授/全体監修)  
清家剛(新領域創成科学研究科准教授/構法監修) 藤井恵介(工学系研究科教授/報告書監修)



左から、藤井恵介氏、千葉学氏、香山壽夫氏、西村幸夫氏、清家剛氏。

## 安田講堂の歴史

**香山** 東京大学安田講堂は1925(大正14)年7月6日の竣工以来、常に東京大学のシンボルとして華々しく扱われてきただけでなく、建築作品そのものとして重厚にして品格のある独自の個性を持つものです。しかし、この建築は時代のさまざまな側面を反映しつつ、当時の建築の主流とは少し離れた姿勢が取られ、これまで評論家や歴史家によってその特質は正当に評価されてこなかったように私は思います。

まず、そもそもこの独自の意匠は誰の手によってなったものなのか、そしてそれは、いつなされたものなのか、はっきり知られていません。このことはまことに興味深いものがあり、私なりに、これまでもいろいろ資料を調べてきました。内田祥三先生\*1が最初の案をつくられ、それを岸田日出刀先生\*2が直された、ということは一応知られていることだと思えますが、どこまでをどちらの先生がいつ行ったのか。安田善次郎氏\*3からの「便殿と講堂」の寄付の申し出を大学が受け入れたのが1921(大正10)年の7月で、学内には直ちに設計調査の委員会が設置され、塚本靖\*4、内田祥三の両先生が当たられて、その時実際に案をつくったのは内田先生でした。そしてその基本設計案は、なんとその年の12月に出来上がっています。高低差の大きい敷地、大学の中心というその位置、講堂と事務局を複合させるといった複雑なプログラムを、当時36歳の内田先生がわずか5カ月でまとめたのは驚きです。この案の先生直筆の立・断面図は先生の作品集にも載せられているもので、内田ゴシックの特徴的な要素であるピナクルの付いたバットレス状の柱が壁面を取囲む意匠です。\*1 そしてさらなる驚きは、翌年1922年、実施設計に取りかかるにあたって、その担当に大学卒業直後の岸田日出刀をもって当らせ、そしてその岸田は、基本設計の平面、断面、構造形式をほぼ忠実に守りつつも、外観および講堂内部の意匠を、まったく別なものに改めました。\*2 施設部に残る同年12月の図面を調べてみると、すでにこの時、岸田デザインに改まっていることが分かりますが、さらにその4

カ月前の8月に新聞発表された石膏の大模型を見ても今日見る安田講堂の意匠となっています。ということは、岸田は大学卒業直後の身で、この大改造を、4カ月足らずで成し遂げたということです。信じがたい能力、気力だと思います。半円形の講堂平面、柱割り、そして柱間ひとつに2本の副柱を入れる形等、基本構成はほとんど忠実に原型に従いつつ、外観の擬ゴシック風の柱は消え、濃赤色の壁体がそそり立ち、頂部で反り返る重厚な表現になっています。外形でひとつだけ大きく変わっているのは、正面時計塔が内田デザインでは真直ぐに立ち上がっているものを、岸田デザインでは、中間部で両側に広げたことです。これは、今日でも並木道の正面をかたちづけている、きわめて有効な変更だったと思います。内田基本設計案の講堂内部の意匠は、断面図に描かれているものから判断する限りでは、全然うまくいっていません。古典的なコラムとエントランチャーでまとめようとしていますが、高さが不揃いでまとまりが悪いし、正面の玉座の上に用いられているオジーアーチの形はなんとも不格好、私が見るところでは、内田先生も、どうしたらいいか迷っているように見えます。そこで、岸田に思いきってやらせてみるか、ということになったのではないかと、まあ、これは私の推測です。

しかし、岸田日出刀の案を見て、最初内田先生が困惑され迷われたことは、自らの言葉で残され、私自身も、先生の御長女から直接うかがいました。細部の幾何学的模様が、当時のアール・デコ風のものであり、先輩の野田俊彦\*5の手によるものもあると言われてたりもしますが、いずれにせよ、この内田・岸田ふたりの巨人の業の交錯して出来上がったこの作品については、さらに研究が深められ、広く知られる必要があると、私は強く思っています。

**藤井** 内田先生はこのあと、東京大学のキャンパスに、工学部列品館や図書館、法文学部の建物といった内田ゴシックといわれる建物をたくさん設計されていますが、いちばん最初に手がけられたものがご自分のスタイルではなかった、しかしそこを許容された点はとても興味深いです。最初に提案された安田講堂のかたちを内田先生は大好きでいらした。それにあえて違うデザインをかぶせた。たとえば、天井の三角形の意匠は確実に岸田先生のアイデアだと思います。モダンな曲線と直線、幾何学的な模様は、岸田デザインであり、それを許容されたことがどのような思いからであったのかを想像します。

安田講堂は、1968(昭和43)年の東大紛争で、全学共闘会議によって占拠され、機動隊との衝突の場となったことでその名を知る人も多いと思いますが、それまでは入学式や卒業式といった大きな行事以外は使われず、学生に親しまれた建物ではなかったようです。当時2,000人以上を収容するホールというのは、使い道が難しかったのかかもしれません。紛争後は約20年にわたり荒廃状態のまま閉鎖されました(事務室は順次「学生部」等として使われるなどしていた。当時の卒業生は3,000人ほど、現在は4,000人弱)。昭和の終わり頃に、再度使用する企画が持ち上がり、香山先生を中心に安田講堂の整備計画が建てられて、1991年から使用が再開されました。

## 本郷キャンパスにおける安田講堂

**西村** 現在の本郷キャンパスが西面する本郷通り(国道17号線)は江戸時代の

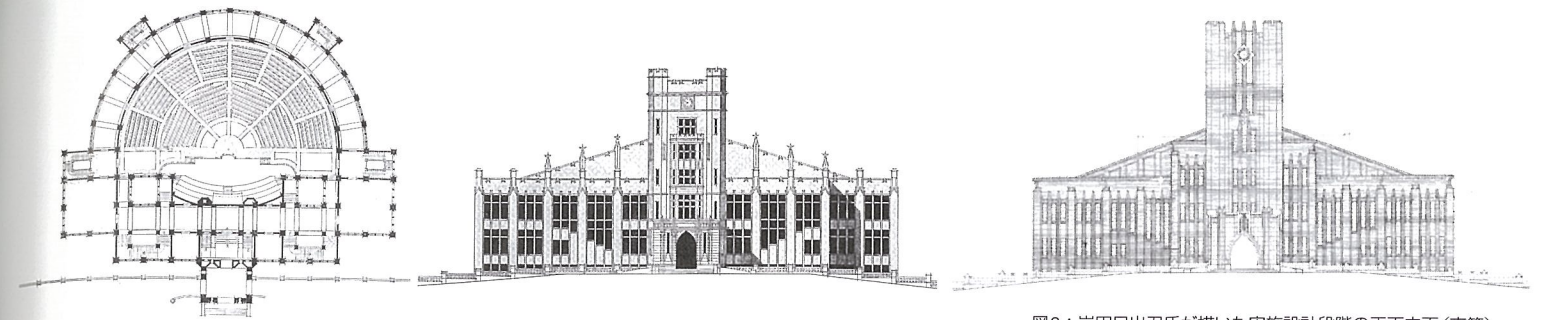


図1:内田祥三氏がはじめに設計した安田講堂(1921年)3階平面図と正面立面(直筆) 図版共に出典:『内田祥三先生作品集』鹿島研究所出版会、1969

図2:岸田日出刀氏が描いた実施設計段階の正面立面(直筆) 提供:東京大学施設部

中山道で、当時はここに多くの大名屋敷が建っていました。当時の資料と照らし合わせると、本郷キャンパスには加賀藩上屋敷が建っていることが分かり、敷地は中山道が通る尾根の西側の高いところから、東側に向かっていく斜面地であることも分かります。

もともと東大のキャンパスは、医学部のある南側(当初の鉄門、現在の鉄門のやや西寄り)がメインの入口でした。その後、南側の敷地が建て詰まってきたことから西側の本郷通りからのアクセスをメインにした際に、西の正門からいちばん引きが取れて、かつ正面を向いて建築が建てられる場所に、現在の安田講堂の敷地が決められています。西から東に少し傾斜して下がる位置が選ばれたのです。いちばん東の奥に建てると、東西の長い軸が取れ、それに直交して南北の軸が手前に配置できます。三四郎池の北側でなおかついちばん長い東西路が取れることを考えると、考え抜かれて場所が選ばれているなと思います。1896年頃の図面を見ると、現在の正門の位置に立つ仮正門を入るとすぐ広場があって、広場に対して工科大学や理科大学、法科大学、文科大学、図書室が並び、広場を囲むような配置となっていました。それぞれの学部ごとの別棟になっているけれど、広場に出れば専門の異なる学生たちが自由に交わる。それは大学の理想形と考えられていました。そのような配置とユニバーシティの教育スタイルを表現したキャンパス配置になっていましたが、徐々に建て詰まり、大きな広場をあきらめざるを得なくなって、関東大震災の頃から現在の街路型のキャンパスに変わっていききました。\*3・4 その街路をつくるために、いちばん引きがある場所に大学のシンボルを建て、軸線を引く。それに則って工学部列品館ができ、新しい総合図書館ができ、工学部1、2号館ができてキャンパスの街路景観をつくっていききました。現在の銀杏並木が中心となるキャンパスへと大学があり様を変えたのです。その起点として安田講堂は重要な計画であったと思います。

**藤井** 関東大震災の少し前に、内田先生が大学のキャンパスを整備し、校舎を増築していく必要があることを大学内で説き、震災前に工学部2号館が竣工、工学部列品館が着工しています。結果的に関東大震災によって、多くの建物が破損し、焼失してしまったので、内田先生を中心に新たなキャンパス計画が作成されたのです。もし震災がなかったとしても、内田先生がきつと同じような軸線を入れた計画をつくって提案されていたのではないかと思います。現在の本郷キャンパスまで引き継がれているこの時の計画は、道路に建物のファサードが接していて、サンクンガーデンがあって、ヨーロッパの都市のような、日本で言うなら丸の内オフィス街の縮小版であるかのようなキャンパスです。

**香山** とりわけ工学部1号館が典型的ですが、建物をドライエリアで囲み、1階が半階上がってその下に半地下がある形式。イギリスの街をつくっている典型的な断面です。この断面形式をキャンパス全体に徹底したのは内田先生の執念だし、日本で最も成功し今に継続している唯一のアーバンデザインといってよいのではないかと思います。丸の内は消えてしまいましたからね。

**藤井** そうなんです。日本の中で再評価すべき街区的キャンパスだと思います。**西村** ストリートには、道路空間だけでなく、建物が接して建っているの、建物のエッジがあって、それが空間に立ち上がって風景をつくり出している。

それがロードとの違いなんだと一般に言われているのですが、ストリート、つまり「街路」をつくる秩序をつくられたのは明解な功績ですね。

**藤井** 日本では伝統的な建物という木造を考へがちですが、東京大学には煉瓦や石を用いて、ヨーロッパ型の都市をつくらうとした痕跡そのものが残っており、そのど真ん中、キーストーンのように安田講堂があります。最初の話にもありましたが、安田講堂の敷地は台地の上と下で大きな段差があるので、これは大きなデメリットだったと思うのです。しかし、建物の高い方からアプローチすると講堂に入り、下の事務所部分を抜けて出られるというように、うまく段差を繋げて活用している。

**西村** 以前に渡辺定夫先生\*6がキャンパス計画をなさっていた頃、内田先生から渡辺先生が聞いたことを又聞きしたのですが、安田講堂の場所を決める時、「坂道を起こした」という表現を内田先生が使われたそうなんです。それによって坂道をだらだらと下るのではなく、そこに建物が立ち上がって空間を引き締めることになる。

**香山** 建築家として追想像すると、グランド・レベルの下に2層、上に2層のアイデアを思いついた時点で、やったという気持ちだったでしょうね。表は2層で堂々と建ち、下から入るとさらに2層の空間が納められている。この発想は卓抜です。

**藤井** 本来大学は本部建物がだいたい正門の正面に建つものなのですが、当時の東京大学は本部も講堂もなかったんです。講堂の機能だけであれば下の2層は必要なかったかもしれませんが、本部を入れるためにはこの構成が必要だったのではないのでしょうか。安田講堂は、講堂、本部校舎という二重の意味で、大学の中心的な役割を担うことが企画されたのです。

## ふたつの大改修

### 平成の第1次大改修(1990年)

**香山** 1968年の大学紛争において、安田講堂は過激派学生集団によって占拠されましたが、彼らが翌年排除された後も、20年間、講堂は封印されていました。下の階は、少しずつ修復され、学生部の事務室、保健センター等に用いられるようになっていきましたが、講堂は閉じられたまま、使われていませんでした。過激派の残党の標的になることを、大学当局は恐れていたからです。誰も入らない暗黒の大空間が、キャンパス中央に20年間鎮座していたわけですから。放置されていたのは安田講堂だけではありません。60年代から70年代、他の戦前からの内田ゴシック建築すべて、そしてキャンパスそのものが、軽んじられ粗雑に扱われていました。川上秀光\*7、渡辺定夫先生等のさまざまな努力はありましたが、はっきりしたキャンパス・プランもないまま美しい建物が数多く壊されて、醜い建物に置き換えられ、むしろ本郷キャンパスの移転先として、立川、昭島、そして幕張などが熱心に議論されていたのです。

こういう流れに、敢然として立ち向かわれたのが、建築史の稲垣栄三先生\*8でした。歴史が積み重なって出来ているのがキャンパスである。それを移すことは、歴史を捨てる暴挙であると主張され、古い建物の保存再生の必要性を説かれた。この稲垣先生の主張に支えられて、はじめて本郷キャンパスで実現したの

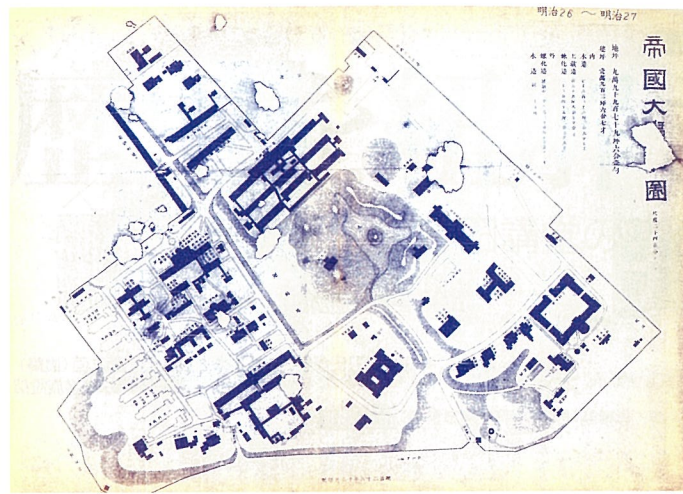


図3：明治26年～27年頃の東京大学のキャンパス（上が南西）

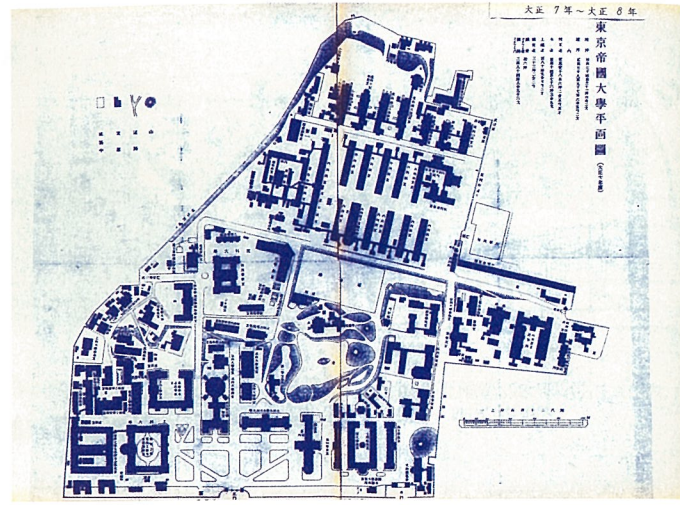


図4：大正7年～8年頃の東京大学のキャンパス（上が東） 建て込んでいる状況が分かる。図版2点提供：東京大学施設部

が、工学部6号館の屋上増築（本誌7505）に始まる一連の私たちの仕事ですが、こういう新しい流れが70年代の半ばに生まれたこともあって、80年代に入ると、安田講堂を生き返らせようという意識が育ってきました。学内に「大講堂利用計画懇談会」が設置されたのが83年で、私がキャンパス・プランに関わり始めたのはこの頃からです。講堂についてのこの時の議論は、劇場に改造しろ、いやコンサートホールにしよ、いや最先端のAV会議場にしよといった思い付きを放談する態のものでした。

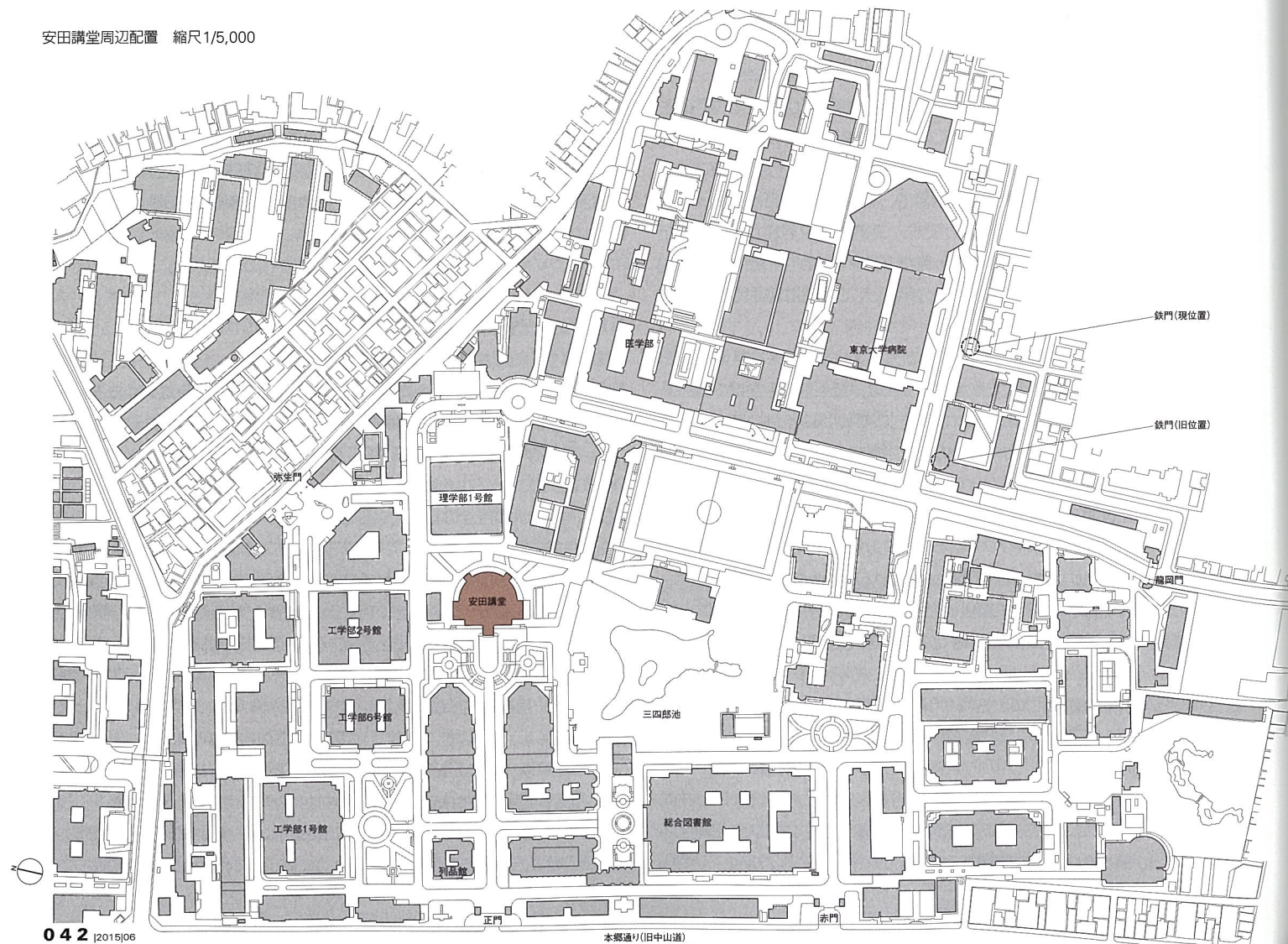
その時、きわめて具体的に説得力のある発言をされたのが稲垣先生で、講堂の意匠を尊重し保存再生しつつ、下階を「アーカイブズ（文書館）」として利用する提言を「東京大学史紀要・第五号」（1986年）に発表されたのです。それを受けて翌年「紀要」の第六号に、稲垣先生と私の連名で具体的な試案を発表しま

した。講堂の東側に増築して新しい入口と展示スペースをつくり、三四郎池に繋がる南側を広場にする考えです。大きな模型をつくり、さらに水彩や鉛筆のドローイングをたくさん示したので広く関心を集めました。この計画案は、研究室の大学院生にも加わってもらってまとめ上げたものです。<sup>45</sup>

**千葉** 僕はちょうどその時、香山先生の研究室の大学院生で、まさにその議論が動き出した時だったのだと思います。香山先生のもとで、安田講堂に博物館を組み込んで改修するという案をつくったのをよく覚えています。

**香山** そういう、いわば助走期があって、いよいよ1989年、大改修に着手することになりました。これが、いわば、「第1次の平成大改修」です。過激派に破壊され、そのまま20年間放置されていた講堂内部、そして警官隊の正面からの攻撃を受けたロビーや便殿（天皇の休憩室）は惨憺たるものでした。椅子

安田講堂周辺配置 縮尺1/5,000



は壊され、バリケードとなり、床のフローリングは剥がされて燃やされ、ロビーの大理石は割られ投石となって消えていた。この破壊に加えて、設計にいざ取り組んだ時、さらに大変だったのは、大学執行部から示された改修の基本構想で、不足しているトイレや倉庫を増やすために、美しいロビーを仕切って使おうといった恐るべきものでしたが、こういった安直な改修案をひとつづつ粉砕し、保存再生を正面に据え、その上で、必要にして可能な改良を行うという基本方針を確立し、承認されて、ようやくスムーズに運ぶことになりました。今日のように、いろいろな委員会はありませんでしたから、要所要所で、直接学部長会議で総長以下の執行部に説明し、全員ニコニコ賛成という風に進めることができたのです。この時、保存再生が基本といっても講堂内部で大きく変更したことが2点あります。座席数と、講壇の形です。壊れていた座席を最初の形を尊重しつつ、背の伸びた学生の体形に合わせて大きくし、メカニズムも改良してくれたのは、内田先生の親友で、日本最初の講義室家具を開発した「コトブキ社」の意地と技術でした。その結果、座席の寸法が大きくなって、数が当初の1,738から3分の2に減って1,144になったことで、講堂の規模として適正になったと考えています。また正面の巨大な講壇。これだけは、今日の式典にも不向きだし、この大きな壇があると講義にもシンポジウムにも妨げになるので、アール・デコを意識しつつ、インテリアデザイナーとして著名な松本哲夫氏に新しくデザインしていただきました。便殿も、当初の立派な壁布をできるだけ尊重しつつ、復元したのです。正面入口から入ると両側に展開する丸アーチの重なるロビーは、岸田日出の意匠の最も魅力的な空間なので、これも当初の大理石に出来るだけ近いものを用いて復元に努力しました。

### 2015年、新たな改修一光を再現する

**西村** 2011年の東日本大震災で、安田講堂にもクラックが入ったり、一部天井が剥落するなどの被害があったため、大々的な耐震改修をすることになりました。建物の老朽化が進んでいることもあり、この機会に徹底的に改修をして復元できる場所はできるだけ創建当時の姿に戻そうという話が自然と湧き上がり、今回の改修に至ったのです。提案型のコンペが実施され、香山壽夫建築研究所が選ばれました。

また東京大学の構内の建物に大きな変更を加える場合には、キャンパス計画室で審議をして、具体的な構想段階と、設計段階で詳細をチェックし、承認を出す取り決めがあります。私の前のキャンパス計画室長であった内藤廣先生の頃から、大学のアイデンティティとキャンパス景観を保全していくためにも、そのような体制がつけられました。設計者と密に議論をしながら、大学側の窓口になってくださる方として、安田講堂は全体監修を千葉先生にお願いし、天井の改修や構法的な部分は清家先生、他にも学内の専門家が設計者と打ち合わせをしながら、全体として仕事を進めていく体制としました。

**千葉** 僕が全体監修をすることになって最初の大きな議論は、キャンパス計画室の中で出されたいくつかの耐震改修の方法についてでした。耐震壁をどのように配置するかという案の中には、円弧状の外壁の外側に鉄骨のバットレスを取り付けるという、その外観を大きく変えてしまうような案もあり、これは大変な事態だと思いました。そこでまずは、安田講堂をこのキャンパスの中でどのように位置付けるのか、といった議論が必要であることを話したと思います。そう考えたのは、先ほども話に出た1986年頃に関わった安田講堂の改修案があったからです。当時、香山先生は東京大学の本郷キャンパスの将来像について主導的立場にいらして、その延長上に安田講堂改修計画があったのだと思いますが、その時に研究室でつくった案は、裏側の広場側に大きく増築をするというものでした。今思えば、バットレスなどよりも大掛かりな増築案でしたが、安田講堂の裏側を、広場も含めて一体的な空間としてデザインし、キャンパスの中心として位置付けていくものでした。その時に出した方向性は、今でも有効ではないかと思えます。つまり、単なるモノとしての建築物として保存するのではなく、周囲の広場と一体になった環境を大学の中心として位置付け、より多くの人に開かれた場になっていくべきだと考えたわけです。

もうひとつ、今回の改修が単なる耐震改修ではなくなった時点で僕がいちばん

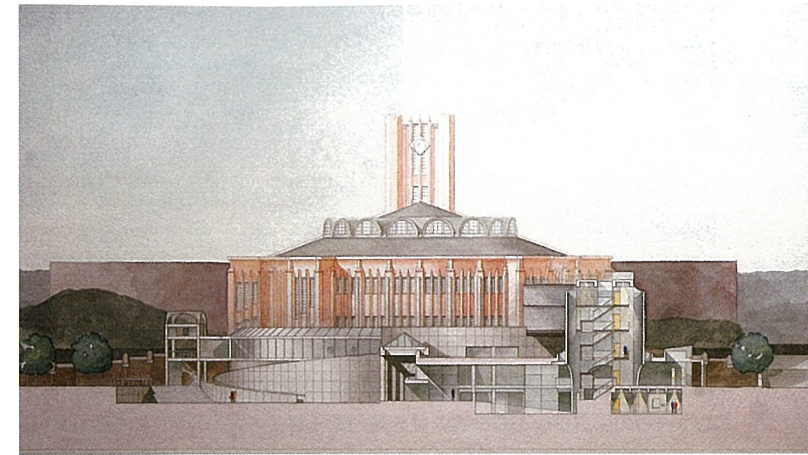


図5：安田講堂の改修案。東側から見る。ドローイング：河合俊和（提供：香山壽夫建築研究所）

意識したのは、「光を復元する」ということでした。復元的改修というと、とかくモノとしてどのように元に戻すかということが議論の中心になってしましますが、創建時に安田講堂がどのような光の状態で作られていたのかも含めて、元の姿に丁寧に戻すべきだと考えました。

**清家** 私は今回、主に天井の改修や構法的なところを担当しました。東日本大震災では、全国のさまざまな建物の天井が落ちて被害が多数出ているため、安田講堂の耐震改修をする際にも、当然天井の安全性を考えなければいけないという話になったのだと思います。

当初は大講堂の天井の改修が主目的であり、国交省の技術基準もあり、既存不適格にならないように変更して安全性を確保する方向で進んでいたのですが、実際に工事に入ると、3階、メインエントランス部分、階段回り等々の天井がほとんど同じ構造（鉄骨の骨組みに網状下地にラスモルタル+左官）であることが分かったのです。しかも天井だけではなく、壁の曲線部分も同じ構造で空間全体が覆われていたため、ほとんどの部分が危険と見なされ、天井はすべて撤去して、乾式構法でやり直すことにしました。

既存の天井はほとんど撤去したのですが、痕跡を残しておくため、撤去した天井の一部は保存し、いつでも構法分析をできるようにしてあります。また、3階のトイレの一部にももとの天井を残して、それがガラス越しに見えるようにしています。さらに、一切手を付けなかった天井を4カ所、ほとんど使われない階段の最上部の天井をもとのまま保存して、ネットで覆って残しています。

**千葉** 耐震改修のためには、結局いろいろな部位に手を入れ、仕上げ材なども撤去しなければいけない。ならばこれを機に、不備のある部分は徹底的に直すことになったわけです。過去の改修履歴もすべて紐解き、よい改修、そうでない改修をきっちりと再評価し、本来のあるべき姿に戻す。その上で、次の時代へと引き継げるようにと考えました。大講堂の天井も、そういったプロセスを踏んで復元改修が行われています。

**清家** 安田講堂の天井は、震災後にいろいろなサンプルを拝見した時には、十分に固くて安全な状態だと思いました。でも、次の50年間も使えるのか？と聞かれると、それに「はい」と答えることができませんでした。これから50年間の安全性を確保するには、いまの日本の職人の技術で元の天井を再現するより、現代的な技術や材料を使って再現するのが現実的です。特に改修前の天井は100kg/m<sup>2</sup>以上の重さがあったのですが、それを軽量化して、今は15kg/m<sup>2</sup>程度になっています。軽くしてからしっかり取り付け、できるだけ長くもつ材料や部材を使う。以前の天井はラスモルタルに左官仕上げだったので、最終的に左官がはがれ落ちる不安がありました。仕上げ面も一体化したGRGという石膏をガラス繊維で補強した乾式パネルに変えて、剥離する危険性がなくなりました。

デザインを大幅に変えるかどうかは、意匠側の議論が主になりますが、構法側としては、安全性が最優先事項であり、そのために乾式パネルを用いたり、内部鉄骨のあり方を変えたり、現代的な構法にしているのですが、天井は創建時



左：3階講堂ロビーのトイレの天井は、ガラス越しに保存された既存天井が見える。右：今回復元されたパーケットフロア。

のデザインを忠実に再現した方がよいとのコンセンサスがあって、音響的效果やホールの天井としての役割は優先順位を下げて考えています。天井パネルは6個の四角が合わさったひとつのユニットで構成されていて、十数枚ごとに放射状に筋(目地)が入っています。意匠にも影響するので、千葉先生や関係者の皆さんと工場で確認して進めました。

**千葉**　建築は、使われてはじめて価値のあるものです。その意味で復元的改修は、オリジナルを最大限尊重しつつも、今日的な要求に応じて変える部分も許容することを基本方針とするものです。天井のデザインも、がらっと変える選択もあったかもしれませんが、安田講堂の歴史的、空間的価値は、関係者間である程度共有されていたので、議論は比較的スムーズに積み重ねられたと思います。ただ具体的な設計においては、「材料」の復元か「かたち」の復元か、また「構法」の歴史的価値はどう扱うのかなど、ひと言ではルール化できないもので、監修の最も困難な点でした。

**清家**　大きく変更していく部分の議論は大変でしたね。今回天井は復元したのでデザインの議論はあまりありませんでしたが、耐震要素が入る回廊部分はデザインも変更せざるを得ないのでさまざまな議論があり、キャンパス計画室に何度も提案を出して、時間をかけていまのかたちになりました。窓の部分は、環境および構法の専門家として野城智也先生が担当され、デザイン的には千葉先生が見ていただきました。安田講堂の窓枠は創建時はスチールサッシですが、1960年代から多くの改修が行われていました。それを元の状態に戻すかどうか。復元を前提にすると、スチールサッシに戻すべきかもしれませんが、コストや長期的な性能を考えると難しく、今回新しく入れ替える部分はアルミサッシに変える判断をしました。その時に野城先生を含めた話し合いの中では、先ほどと同じようにとにかく外観を大切にしよう。外観の見えがかりをある程度保存することを優先し、窓のディテールをつくる方針として、改修を進めることになりました。基本的にスチールサッシのまま残せるものは残して、アルミにした方がよいところは変えるのですが、一部居室として使う1,2階は、常時人がいる空間になるので、断熱性能がより求められます。ここだけ見え方が変わらないように、アルミの窓に取り替え、内窓を付けて性能を確保するなど、窓についてはいくつものパターンで改修がなされました。

**千葉**　開口部は、開かなくなったり落下の危険性もあったりと、機能的には問題が多々あったので、取り替えは前提でしたが、ここでも形態復元か素材復元かなど、議論が繰り返されました。最終的にはアルミサッシで形態復元していますが、その選択においても、スチールという材料の質感は復元しなくてもいいのかといった議論は最後までひきずりました。ただ、当時のようなサッシを鉄で再現することは、現代の技術をもってしても、コスト的に非常に難しいことが分かり、残せるものは残し、変えるべきものは変えることになったのです。ただアルミサッシでも、当初の割り付けや見付け、さらには金物などにも細心の注意を払いました。また、サッシを通して見ていた風景や、そこから入ってくる光も含めて大事な要素なのだという意識を持って、部材の新旧に関わらず、その場所が持っていた場の雰囲気을できるだけ損なわないように配慮しました。最終的にはさまざまな素材、工法が混在することになりましたが、目指していたことはどの場所でも同じです。

### 時間を継承する

**香山**　建築は、美術館の中の展示作品とは違って、使われつつ維持されるものですから、絶えず大・小規模での、修復作業を伴うのは当然のことです。今回の改修は耐震性を高める条件がありましたが、安田講堂の使用目的の変更はせず、その意匠は尊重し保存するという基本は、先回の改修で確立されていましたので、その点ではもはや苦しむことはありませんでした。しかしながら、先回の大改修の際、折角苦心して復元したところであるに関わらず、改悪されているところがありました。講堂の床です。過激派学生たちに剥がされ燃やされた無垢板パーケットの床を、残っているところは丁寧に扱って補修してあったのですが、その後ある時、灰色のカーペットで全面覆われてしまったので、床の復旧はいちばん優先しました。その他、先回の改修でも、やれなかったところがありました。下階2層の改修です。ここの空間は、雑多の用途のために、雑然と使われてきていた。円形の外形に、放射状の構造体が入っているため、通常の矩形の間仕切がやりにくく、扱いにくかったこともあったでしょう。今回、本部がここに入ってくると決まったので、この構造体に合わせた、放射状のプランを工夫し実現しました。これで、内田先生の最初の構想である、安田講堂下階を大学本部とするという考えも90年ぶりに実現できたと思っています。

**清家**　耐震要素という強い壁が入ったおかげで、そうそう骨格を壊すことができなくなりました。放射状の方向性も出たので、ここからまた改修は行われると思いますが、動かせない壁が外側を向いて置かれているので、それ以上細かくはできないと。ある節度をもって今後は変えられていくと思います。

**藤井**　当初から、内部はパーティションを入れ替えて使っているのです。昔は大きな一室空間にして使う発想がないし、小さな部屋が並んで使いにくかったと思います。暖房の性能もよくなかったので小室割にする必要もありました。今は空調の性能もよいので、オープンに部屋が使えます。平面の持つ特徴を活かしながら、使いやすい空間が生まれたのではないのでしょうか。

**香山**　半円形講堂全体の耐震補強のために、講堂の外周を囲むロビーに、補強壁を付け加えました。この壁をどういう形のものにするか。この建築の大きい魅力のひとつである半円ドーナツ状に回転していく空間を損なうことなく、むしろ強化したい。大きい模型をつくり、覗き込みながら、スタディしました。前面ロビーで用いられている岸田丸アーチをここでも使うことは間違いなく面白いだろう。しかし、あまりにも、新しい個性が出過ぎるかと悩んだ末、結局、以前からここで用いられている門型の形状を、展開することにしました。

この耐震補強は、内部ではなく外側で行うことも考えられました。13世紀フランスゴシックの内陣外側の飛梁と同じように、弧を描くアーチが、放射状に回転していく形は、さぞ美しく力強く、講堂東面を活気付けるであろう、と思ったのですが、一方、これも、新しい強烈な個性を安田講堂に与えることになり、いいのか、悪いのか。学生時代、まことに恐ろしい存在であった岸田大先生に、怒られるのか、褒められるのか、いや、やはり睨まれそうで、やめてよかったように思っています。

#### 本郷キャンパスの未来への展望

**清家**　今回は外観の保全が大命題としてあった中で、今後この建築が残っていくためにも、これからの改修にコストがかからないように、できるだけメンテ

ナンスしなくてもよいディテールとすることをセットで考えていたのが、建築構法の分野としては面白かったです。香山先生のお話をうかがうと、これから30年後に、またどういう議論や気運になるのかは分かりませんし、そういう意味では、30年、50年経っても、使い続けられるものになっているのか？ それを議論できたのはよかったと思っています。また、そういった内容を細かく記録として残し、今後に繋げていってほしいです。

**藤井**　議論した内容や、その時に何をしたかを報告書にまとめて残しておけば、次にバトンタッチできますね。それが切れてしまっていると、次に何かをする時、前の修理が分からないので、何かの事故や失策が起きる可能性があります。危険ですよ。資料をしっかりと纏めて報告書として残しておくことはとても重要なことだと思います。

**西村**　大学のキャンパスとしては、広場型から街路型へという話がありましたが、いまちょうど総合図書館の前の広場の地下に300万冊の書庫を備えたライブラリープラザを新設する大工事をしています。工事を進めているのですが、そこに明治20（1887）年代の以前の図書館の基礎が出てきて、その基礎の軸と新しい図書館の軸が完全に一致することが発見されました。基礎の間に噴水がありますが、噴水をつくるのに基礎が壊せなかったので真ん中に置いたのでしょね。その正面になるようにこの建物が配置されています。逆に言うと、広場の持っていた軸で街路の中心軸ができていったのです。昔ここが広場だった頃の図書館の中心軸は、かたちは変わっていますが工学部1号館に向かう軸と合っているのです。ものは少しずつ変わるけれども、大切なことは継承されていく。そういうことの大きな手がかりを過去の人たちは残して伝えていきます。それをわれわれも繋いでいかなければいけないと感じています。

**千葉**　今回この改修に携わって、改めて安田講堂の歴史を紐解くよい機会になりました。興味深かったのは、多くの人の思いや複雑な事象が建物に反映されていることも含めて、大学を象徴する建物であり続けたということです。また同時にこの建物は、さまざまな困難から復興する歴史でもあったということです。工事中に関東大震災にあい、学園紛争でぼろぼろにされて封鎖され、今回また東日本大震災で被災する。そういう歴史を背負いながら、その困難を乗り越える中で建物の耐震性や、大学における位置付け、また建物のある種の象徴性が問直されてきた。それはこの講堂が、やはり東大の中心であったからこそ浮上した議論だと思いますが、こうしたことも含めて安田講堂の歴史はそのまま大学の歴史でもあったのだと言うことができます。今回の改修は、これを保存しようというコンセンサスが広く共有されて進められ、なおかつ今回は、大学の本部が戻ってくる場所になることも決まりました。これもまた象徴的なことで、いまの時代を的確に反映していることですし、そういう意味で改めて改修というのは過去の何を継承して何を変えるのかの見極めが大変大切だと思いました。

将来に向けて思うことは、安田講堂は本郷台地の段差を実にうまく利用してきた建物で、それが非常にシンボリックだったために高台と低地といった対比が強調され、東側がある意味で裏的な性格を持ってしまっています。この状況を変えていきたいと思っています。かつて学生の時に香山先生のもで描いた安田講堂のプランは、その意味で今でも再現してみたい。どちらが表かと裏もなく、安田講堂を大学の中心、結節点と位置付けていく。本部が戻ってきたからこそ、東側の広場をしっかり整備し、1階は誰にでも開かれた快適な場所にして、さらに池之端の方まで含めて今までとは違うキャンパスの展開をつくり出すきっかけになればよいと思っています。

**香山**　安田講堂を大学全体の中心とすることによって、それまでばらばらに建てられてきたキャンパスを統合すること、これが内田先生の信念であり、大目標であったわけです。安田講堂をこの場所に計画するにあたっては、当初理学部の猛反対があった。当時の長岡半太郎理学部長は辞表を手にして計画の撤回を求めたことが記録に残っています。しかし内田先生は、理学部を裏にするのではない、新しい中心をつくるのだと説かれ、その信念を貫かれた。今のキャンパスの骨格はその時につくられたといってよいのですが、しかし内田先生のお考え通りに、講堂の理学部側も表にできたかということ、そうはならなかっ

た。内田先生の描かれたキャンパス全体の鳥瞰図には、講堂の東側には三四郎池の日本庭園に続く、フランス風の小庭園が示されていますが、そのような空間ははまだつくられていません。それどころか、雑然とした銀行のATMブースや物置の建ち並ぶ空間となっています。次に改修されるべきところは、ここだと私も思っています。

建築の保存改修とは、常にこうした可能性を把握し、丁寧にねばり強くやっていくべきものでしょう。しかし、よくなる可能性とは、一方で、悪くされる可能性でもあることを忘れてはいけない。文化財の指定を受けたからとか、ルールがつくられたからといって、安心が確保されたわけではない。大切なことは、判断できる能力と、実行する意志をもった専門家がいるということと、それを支える一般の理解があるということです。それがないと、いつ何時、再び灰色のカーペットが敷きつめられるか分からない。それが現実の社会で、生きている建築の現実です。東大キャンパスも例外ではない。

建築に対する無関心、無理解は東京大学においても日本社会全体と同じです。たまたに、面白おかしいイベントやハブニングとして関心を集めるだけでは、持続する維持、開発には繋がらない。一般社会の状況を嘆く前に、せめて東大内で、建築について関心、理解を高めていきたいものだと願っています。私が学生だった60年前、東大の建築については、授業においても、一般の建築史においても、まったく無視され、触れられることはありませんでした。そういう時代に、当時丹下健三研究室におられた渡辺定夫さんと西原清之さん\*9が、東大新聞に、東大の建築の面白さ、特に歴史的細部と意匠について連載文を書かれ、私は目を開かれる思いをしたことがあります。

その後も、100年記念の展覧会の際に藤井先生等がつくられたよいカタログ等はあるにせよ、広く学生や一般の人が手にできる本がない。欧米の歴史ある大学のように、東京大学本郷キャンパスについても、そろそろしっかりした建築の案内・解説書がつくられるべき時ではないでしょうか。

**千葉**　アメリカやヨーロッパでは、大学のキャンパス計画は、大学の将来に向けてのビジョンとセットで語られていますよね。日本の場合は、教育の方針、研究の方針にいつも空間がついてこないんです。東大は今後こんな風に変っていくんだというビジョンと対でキャンパスの空間的な展望があり、それがいつも安田講堂に展示してあって誰でも見ることができる。そういう状況がつけられれば、素晴らしいと思います。

（2015年3月6日、東京大学安田講堂にて 文責：本誌編集部）

<sup>[</sup>\*1 内田祥三（1885～1972）建築学者、建築家、三菱合資会社を経て1921年東京帝国大学教授。「内田ゴシック」と通称される建築を数多く設計。1935年日本建築学会会長。1943～45年東京帝国大学総長。

<sup>[</sup>\*2 岸田日出刀（1899～1966）建築学者、建築家。1920年東京帝国大学卒業と同時に技師として宮繕課勤務。安田講堂、図書館などの設計に携わる。1929年東京帝国大学教授。研究室より丹下健三、前川國男らを輩出。

<sup>[</sup>\*3 安田善次郎（初代1838～1921、二代目1879～1936）初代安田善次郎は富山県出身の実業家。1887年安田保善社を設立、安田財閥の礎を築く。長男善之助が二代目善次郎。東京大学安田講堂、日比谷公会堂など、初代の意思を引継ぎ大事業への資金提供を行った。

<sup>[</sup>\*4 塚本靖（1869～1937）建築家。1899年より3年間英仏独に留学。1920年東京帝国大学教授。建築意匠・装飾・美術工芸を研究、多くの後進を指導。1937年帝国芸術院会員。

<sup>[</sup>\*5 野田俊彦（1891～1929）建築家。1914年東京帝国大学卒業後、陸軍省、内務省などの建築技師として働く。「建築非芸術論」など独創的な論考を大正末に多数発表。1925年東京帝国大学図書館建築部工営課長。

<sup>[</sup>\*6 渡辺定夫（1932～）都市計画家。1966年スコピエ都心部再建計画（丹下健三チーム）に参画。1984年東京大学教授。国内多くのまちづくり、再開発に関わりアーバンデザインを指導。

<sup>[</sup>\*7 川上秀光（1929～2011）都市計画家。1975年東京大学教授。都市政策と環境計画について研究、東京の将来像について多くの提言を行う。

<sup>[</sup>\*8 稲垣栄三（1926～2001）建築史家。1973年東京大学教授。東京大学本郷キャンパスの建築群や東京駅など、歴史的環境や文化遺産の保存について先駆的な提言を行う。

<sup>[</sup>\*9 西原清之（1930～）都市計画家、建築家。1957～61年東京大学大学院丹下健三研究室、トロント大学建築学部講師を経て、1965年西原研究所設立。